

5
4
3
2
1
80
9
8
7
6
5
4
3
2
1
70
8
9
60
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10



「小人ナニ小人ナニ助アシとシテはアシ、害ハラとシテはハラ」

文選草卷之三

卷之三



小人ナミ才タレ小人ナミ助タマシとシテなム害ナガシ
いリそシとマタク幼室ハヂのルぞ皆ハシマ此
身ノうちニ來カムて却ハラフてあとトてニあリ
仁子ニコ義ギウイ 慰ソク隱ヒヤクのハシマ惡ナガシのル子ノの
方カタすトよりシテ其ヒ良シと行はマサニ中ハ比ハラフ付ハシマ玉ヒタチ
いシテ脣ヒダリとシテ夷ヒメノ首ヒメノ武ヒメノと憤てハシマ首
陽ヒメノ飢ヒメノ類ヒメノ仁ヒメノを求ひシテ仁ヒメノをゆめハシマたヒ
うツ、悔ハシマすハシマつハシマじハシマすハシマにハシマどハシマり
胸ヒメノとシテ餘ハラフ死ハラフ是ヒメノ仁ヒメノ義ギの君子ノと擅
破ハラフふハラフ復ハラフ々ハラフ好ハラフ例ハラフの老莊ハラフの道を以てハラフいハラフ
虛ハラフ無ハラフ自然ハラフ人ハラフ道ハラフと貴ハラフ之ハラフ前ハラフ真ハラフの人人ハラフ皆
惜ハラフ者ハラフ今ハラフ下ハラフとシテ法ハラフのもうハラフにハラフ身ハラフ令ハラフトシテ一ハラフまハラフイ
法ハラフ師ハラフがハラフ斬ハラフまハラフ一ハラフ類ハラフも法ハラフの僧とシテいハラフや
うツ、念佛ハラフまハラフ有ハラフ三ハラフのの身ハラフもハラフうツ
聖セイ誰タマもハラフよハラフあハラフきハラフ三ハラフのの行ハラフ
といハラフう究ハラフ書ハラフ載ハラフ一言芳談ト云書物肖ハラフ
芳ハラフカニバニ保衣義ホウイヒ後談ハラフカタニ談話ハラフ文ハラフ
詞ハラフ一言芳談トヘガツア達ハラフアリ善好ハラフ

とく草巻之三
九十五
其物よつよてともあと費ヒヤトテ
人ヒトも、どとくシテよもよ風ハラミゆく
家ヨミよ風ハラミゆくよ賊ハジゆく。小人ヒト
財ヨミよ君子ヒトシよ仁義ハラミ行ハスルよけゆく
仁義ハラミ大道ハシマツの廢ハシマツよ起ハサクよ起ハサク仁義ハラミの名ハラミもくハラミの
もく傳ハシマツよく功ハラミよく名ハラミよく是ハラミ賢ハラミ也ハラミ得失ハラミのよしよ
ありハラミ僧ハラミ法ハラミあふよくてハラミてハラミせハラミも說ハラミいハラミレハラミ物ハラミもハラミとハラミ不
てハラミをハラミとハラミ人ハラミをハラミ廢ハシマツよ中ハラミ知ハラミ識ハラミ上ハラミ人ハラミも遠ハラミ俗ハラミよ主ハラミも安樂ハラミ
とハラミもいハラミるよとハラミとハラミり是ハラミ法ハラミをハラミ師ハラミ、ハラミまハラミ近ハラミきハラミとハラミてハラミてハラミらを
とハラミひハラミすハラミそハラミまハラミるハラミ一ハラミ維广經ハラミ法ハラミ猶ハラミ可ハラミ捨ハラミトハラミアリ
ナハラミトハラミよハラミいハラミドハラミアハラミいハラミとハラミり半ハラミ
トハラミ半ハラミつハラミそハラミ一ハラミ言ハラミ告ハラミ談ハラミとハラミやハラミづハラミま
ふハラミまハラミとハラミくハラミ。

モハシキ
モハシキの遍入詩

卷之三

卷之三

卷之二

はをとみうりん貯後事の記

秦太、トニ書

方議是上

まちの日、
まちの月

解脫人の記へるまこと

聖

上人の道

約二十一萬一說一物為本而萬物
皆以之爲體

卷之三

卷之三

トトロニシタリ
一ノ世白ハナムヨモジケルアリ

御上佐より下へと、智をすこしも
と捨てても、もと捨てたもとそれと
舊は、知らざる有難いと料。故戒して、
五九旬の勤めり。とくと舊と云僧。舊
戒。舊乞之僧の佐戒。舊入ふはど
之も「りまの次才」と舊久とを
職意。極舊と有し佐階、名く上萬下
萬。上佐下佐といふ人びく

いへり。最上人やもわづなり
一上齋フウち下齋ツバキよすき。寺ハシマ有
よすき。世人スルヒトが負フうだり。能ハシマる人
を多ハシマく。よしとこ
一佛道ハシマと称ハシマぶ。別ハシマりとあはれも

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The paper appears brittle and stained, with darker, mottled areas along its left edge, suggesting water damage or mold. The overall texture looks rough and uneven.

• • •

佛道と徳行仙坊の詞からまつま
たに義をひきよりひそへ
諸縁と放下してせりのみとありよ
まやくよる
けふも身をすらまと
うてよし身をうへまよとあう称
うきてゆく

わくあよだりて。そひよしよ
ぬ身一への角とすじかのもあくよ
此段も前段としまして道世因人への
生といふんもに去る

相國暴臭公、岩倉の府貝宣公
一男久我の二門へ、更男の
毛色のやうりえそハ美蘇の義と云説
ありゆまともそへまへかくと云詞、そらへ
羨色のやうりえもわづくにのりまへ樂の

人モ。本年とちくに元とゆ
御イモトトレヒト人アリヨナリ
唐摺清状文去ふと代ハ物也カラニツ

心々と堯
奢々と勤々分際々と云
大元檢非定使別當イ唐名職原抄二曰
檢非使此謂淳和天皇御宇天長年中初立

結蓮子作
和名韓禮

置之 異朝も重之 昔唐虞代
臯陶爲士此 云大理 周礼立官曰
大司寇 即此任也 應勢 檢非違
使聽ノ政とちこかつゝ事
考摸トシ 規範 物ヲ作ル分ニハシニ
摸ハ形ノ物ヲ作ル カタニ爰ハ手本

ハ上右より傳りて、も古と云ふ。
松百年と云ふ。累代八云物。
キクボシジン
表筆模範ボシ
左ノ御模ボシ人云々也。



又作中之子也。色兩赤
萬人也。今有其人。

卷之三

わづかの事なかれ。とて

「あがとへ度てよひのありうて
やどりとくにけり。」**あらまき** 伊勢物語そ
えもんから人を次第に、まかせよ。事よ
事とももだくよぬとくゆとももよりや、いかに物
語よ。しすいはもじとれやうたるを、こくし
夜くまきし人々とくふとくの事ある
なれりといふとくの事ある
「あくみひすまれたむかう」とくまき
の事とて遙かくわざなうとく
事とくまき
ゆくよ。いまとくくなかよし。
てたら、土のよ。相こゑ 来すとあら今いふ作
うちのわとく。施よも
桂あ えあらあらとさよとくよ
とくよとくよとくよとくよ
おこがむ桂あ本のよしとく。奈八はが
トサまでてうこなくとくよ
をとくらケやくわがとくよとくよ
ふるやとくよとくよとくよ

もううつしとよまへども心へは。とくとくか序。も
ワニ勇きのまへあく。おこするやうに。あと間を
ひま子。夫りし人のまへと。今くせぬと。がまく
ふよながい。人細くと。ねたぬまくえ。うらばと
答へしと。うり。ゆ。丁口大庭。父名念。と。ゆて。ひし
行内食
具。ま。公。中書九代孫。源。高
基。公。基。是。若。食。内。食。
こ
女房事類
生立也。さふら。ひぐま。
伸。ち。お。九。條。友。師。友。公。早。巴。院。丈。
津。寺。院。長。守。の。院。女。侍。達。る。
入。よ。と。ど。人の。作。よ。く。く。わ。つ。ひ。
階。た。人。止。め。ひ。わ。ト。き。の。ア。と。ま。も。い。と。く。い。わ。つ。ひ。
美。雄。を。あ。洞。院。左。大。と。道。人。
一戦。一
上階庄本多



暮のとくにまことに地にて人の和ぎの様

もあつてよきがばりを重ねるがも

じくかぬかて一生しめくまを

一 生の新事の小節より

一生の新事の小節より

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

うかうか足をあくまくし船底川
水底にわが舟をみるは温氣り

車のまろよ車のまろよ車

うかうかとばる日は夜は

よみやみとばかりと車や人まとい
ここうと門牛とひ居とわといひ

うかうかとばかりと車や人まとい

よみやみとばかりと車や人まとい

内大臣信清公中用白入院のほ

高道とおじて北と南と成る

ノモスレの生れを秦多の召はの男を

高道とおじて北と南と成る

則信清公召料の牛創

高道とおじて北と南と成る

女房の名も名義未詳貞德云臘事

高道とおじて北と南と成る

樟根肥股の牛トリ華金穿義十六

高道とおじて北と南と成る

難信用トニキ泰友牛と好ニ故女房

高道とおじて北と南と成る

次已ノテシナ度と云と今川義元よりよ物語

高道とおじて北と南と成る

宿泊行乞いところよきやうやう九郎の念

高道とおじて北と南と成る

宿河原松津国アリトウ暮露去

高道とおじて北と南と成る

南東より是と薦僧ト一名馬いド

高道とおじて北と南と成る

梵論字梵字漢字西好ハシメトシタ

高道とおじて北と南と成る

九品念佛院佛始トモトモ九品念佛始トモトモ

高道とおじて北と南と成る

虚室坊阿林陀坊あらとく者善露の

高道とおじて北と南と成る

念佛と牛ハ殊院不可限九品念佛淨寺

高道とおじて北と南と成る

道場佛堂ナスドヒ要覽五等と開賣

高道とおじて北と南と成る

修道二處謂之道場

高道とおじて北と南と成る

恨アニヤと思ひてゐアニモアニアニアニ

高道とおじて北と南と成る

ル事はアニアニアニアニアニアニアニアニ

高道とおじて北と南と成る

アニアニアニアニアニアニアニアニアニ

高道とおじて北と南と成る



論語卷第十三
益者三友損者三友

卷之三

前ふもむ人のワム人す
まふと人くとておきり病をさす者と云

ハクミノ人。ニヨハスルカレタケムシ合
ヒハ酒と好人。ヒヨハスルカレタケムシ合
ヒハ盡言シカ人ヒヨハスルカレタケムシ合

生歟飲食とも恣ゆるきも放他とぞこまく
而好人よし事ことの多くと愚ぐれててけらる
めく去ゆ一朝いっしやうのいづれに身みとつつとれど父母おやし
喜よとへこそありあり處ところをう人ひと方かた

三友三ゆき。よハ物トアレ。冬ニよハく。
ト。エヨハ智也。アレ反。

欲為人久安寧
天明况乎朋友相濟之義
現在危王者之牢獄死則杜三途之門戶
弃天得道財賈之助矣

物を友此詞と準じる人からとてのれかを欲して世利と不貪とよ
りわざハ何ツ誰ツ人マ智もあつ友歎豫經云賢友者乃福

膠アマ本草云膠云傳ケ
魚と膠アカニ魚と鱠アマニ之を瑣碎シテ

物が、ハ、孫が、めりて、かゆる、と、蟹、ハ、
アモリ、ち、せ、が、ま、て、し、ま、の、物、か

金魚魚腸と墨じりがちくちく
木草 ひの草 ね草 ト書リ
中陽のくよ
トハナトリのそばゆゑハ内ノコノアシテ直モ

とハやへとひきをひきゆくと、雜
多ニ文墨の雜入矣歟のよ
うがこの物たり。雜 ミタダケ 材草 ミコトノ 九陽 クニヤウ
是トウリヨミキトトミアシガシノ 論詞トウリ トテナリ

卷之三

官。中。其。事。不。可。謂。也。故。之。不。可。謂。也。

棚^{タチ}の入^{アリ}てはふと山^{ヤマ}入^{アリ}道^{シテ}

中宮は御草院平官東二僧院アモウ
常盤井相國 実氏公ルヒミクニカツアミ棚
燐よくヒグワシムトムク行可ム
山入道 も園也実氏公 常盤井相國

おどくゆきましでやうそひと
りやの物とおどくゆきましでやうそひと
之ノ脇
八胡より

中官の父の近習が女官の官職の人ふを里と
此相國の个性自然と上屬の人あるから

てはいふ事なかつてよしとひだり

又此事もは日暮て寝入つゝ事
百十九 カニコト
人乞食入海よりしてと云
鯉 本草綱目韻書を不分明海鷺心鏡鯉音

堅大鰐也。万葉水之浦、鹽尻之堅魚也。其
然ハ其名上代ナリ。ウミダモも貴人ふく食物
ノ料理也。か事ハ末代事ニアリナリ。

てはい事凡てはくばるゆゑも
かくゆよとひだりけり
勅法と持くト馬が馬もも入まへどりかねばれど
直隸じき心こころをけ段だん鯉こい坂能さかのと云次つぎ故美みと記き
観
魚谷うにはよし、いよハはさうかこの物ものそひ
ともなればかくアリテモも鰐わい人ひと爲ため也え
りの下げハはじきとひきそり
人ひとかく却むけ本ほん行ゆきまくらき頭かぶハ下げ

沙也くとび
沙也くとび
沙也くとび
沙也くとび

て以し一車凡てはくほの内に
すとゆよとひどりされ
勤去と持くト馬ノ事か萬もも入まく、どうり也ハ也
直隸川北をは段々鯉城能と云次、故美と記、
寛永
魚谷はよし、いよ、さうるふに物、そひは
ももかねえ力なり。ともも弱人等、
しのび乍ら、公じ色と人見とくつり
人方かへ却く半行、もと頭八下。
伊万里とれことく、とく人物也世
もとくづどもとむ

尚書旗教大篇珍之

奇歎不育風

物外

やあひよそも用意とも前
生人の名の物と思ふ故に罪業と
父も母も思ふ是古通衆生
皆是我父母云々と云ふ

百五

聖人

文やうじう六經四書とくえりわきもそ
父子父子ま婦兄オ朋友五常の道義
モレリレルト肝要しとくまへゆく
字同よそづくよひとみて字同のたと
きにそくとくノ脅脅術病となふとてど
之迹ハ謂之モ足遠バ人を惜ム

筆道八疋上
宗十
とお下次よもく半引と
ふすハハクモモとアヘ
向ひたとわアヘムクガト次よ醫

休)とわらへべ。力と事
らどバ負へど。汝よ已
忠孝小學云伊川先生曰病卧於牀委之庸使
忠之不慈不孝事親者亦不可不知體
六藝同礼註礼樂射御書數謂之
六藝食父の天帝範啓農篇夫食
爲人天農爲政本倉廩實則知禮節衣
食乏則忘廉耻史記酈食其傳云王者以
民火爲天而民人以食爲天

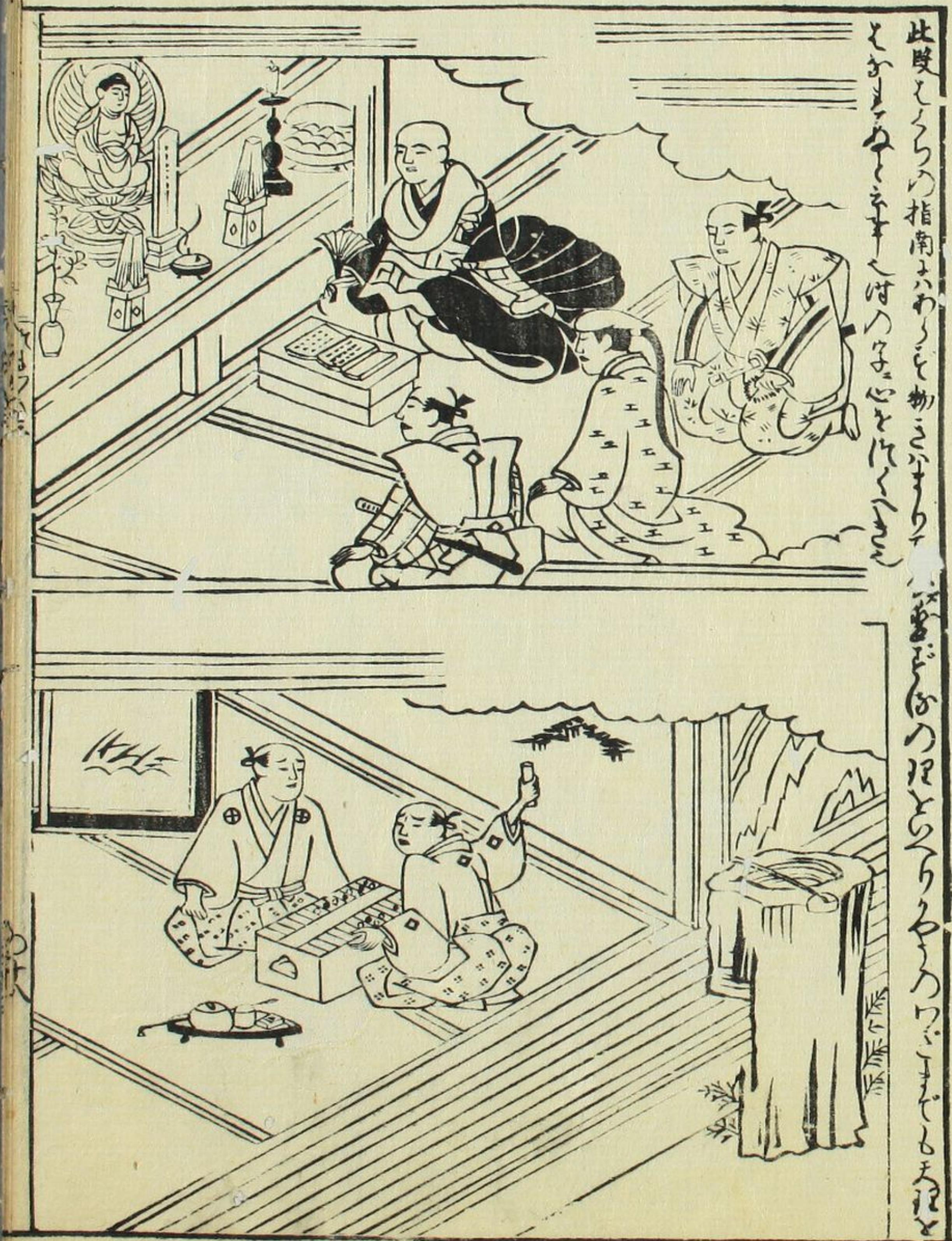
じんとたとど。志存ひくも鬱うわ
射馬御トニ車ノ鳴とら氣ムカシリにむきりゆをしを
くぐるをジル馬と御筋臂スジヒの道ミツハはとくへ
きても首ヘべヘ。とととととととととととと
げかふ人ヒトべベよ汝ヨクよ食エ人ヒト
味ミと調アシすまふ人ヒト大オき也イ

御二五の器とてくふ事ナリ。一もと「人の
行わんりてまへこせん。」
「とづ論語子罕篇丸す。吾也。君子
改能鄙事。君子終乎不絶上宜。
竹象妙。能鄙事。君子終乎不絶上宜。
序。嵇康博枝藝。於絲竹侍妙。
よ。迷云の道。志微玄妙の道。
言にこと重く。詩うぢを達ハ人のやと感を
しりて善とす。ウセと治ふ道。詩經未子序云。詩者人之感物而形於
言之餘也。心え所感。自郭正故周南正南
如正子詩ヲ用テ。勸善。鄭衛。如注
声ヲ用テ。懲惡。是以詩とす。と塵
ノ。古之集真。古天子。每暮辰。養景詔。待臣。頤。安楚者。獻和歌。君臣情由斯可見
賢惠之性。於是相介。皆以隨民欲。擇士之才也。礼記樂記云。礼以道其志。樂以和其色。政以
其行。刑以院其姦。礼樂刑政其極一也。所以同民心而出治道也。礼樂。之。國家。治。若。具。此
此段初段。のり。と。す。文の道。作。又。わ。す。多。経。す。と。と。も。相。違。の。す。に。す。伊。と。も。初
段。へ。と。入。ふ。と。つ。き。文の道。作。又。わ。す。多。経。す。と。と。も。相。違。の。す。に。す。伊。と。も。初
段。へ。と。入。ふ。と。つ。き。文の道。作。又。わ。す。多。経。す。と。と。も。相。違。の。す。に。す。伊。と。も。初
段。へ。と。入。ふ。と。つ。き。文の道。作。又。わ。す。多。経。す。と。と。も。相。違。の。す。に。す。伊。と。も。初

治のまへん更へ近處にて五カ月に以てトモモリモリてまへばよるべからず
をうつりふと似たりと云詞偏、詩す多岐の道にて治人多はらう。あくらばやんくま
リして凡俗とぞくとぞくさればやうの通もハシムがごまや。或ふもかく良
良醫の百味の萬を以て人よ施す日一西人の虚貴とぞひてまつらむに甲斐也
原三云ヤク
之食ノトバふにて可とてモと。とつ、ナム人ノモ仰事
益之事 衣服食器居所醫藥等々
のかへ事とく。ものありある。或直
くてもあめの貴人ノ國のあらま六書
色可樂半わらむ若のあらふ。然道五
更わら
才食 牛令と行ウ。最も
まふ物をうづ
才三す居所 八雨
とつこれどし
醫療とワニス
類セシ不病所
須唯萬物微躯此外更何求
右四ノ歎詔と富マニス
好じよやく次着物ト後羅錦綉と好じ
非と居所。今がとらえハラム事とねよ
わ。すくがハ医療いの承り。四ノ不是
ふと實ノ負者と。之にアヌのとゆれ
とかじと騎。四ノ不使約かハげま
體肩腰とウツモジテ。す。坐とくして
やしたうらばよまとケズ

四の事味ひあとまでりとゆ。し四とぞあとこりわらは
い四の事とぞあひとゆ。と説くす事の事僕約かじ
誰人そととんあらひもれともアヒ騎と好ひへわすはも飢と
をもす風のよきまわねる程ありて段上段。又此医がどく吏とて其の事とも多
がく君子のよきまわねる程ありて段上段。又此医がどく吏とて其の事とも多
きことばに足りて。ば支足よりと卑び。一かと來りへ騎をもとめとひを
是法師ト作者部類。云禽真力新す
載集新於延集ホノ作也
勸めいわし
人よとくれて四十九日ノ
佛事よ。咸聖と仰ト仰ト仰ト
此段、彼是法師が徳と仰てやうに
せとこく。江く清めりて吊しよ。よ
絶て鳴らす。此段尙愚痴人の詔
へ後後。主と本道。道師ト
能爲人說無死道。故名道導師。ト
是法師ト華首經云
百
富

一と事は或有人の行ひしへきとど居人の約は仰て
 いひそり。わざわざこうそ、かくらうり。けの師
ハラ
説法の事ハ詳列たててせを尊
師の教つゝとよやと
 すとひを歎そ人と見とどかよ似ます。一あす
 うも物をばくづかはん。頭とまくと人とばえ
 たり。とくとく。故てかふゞくをむり
 てこりらしくてやい。かきほりとくにめく
は段歎のたゞくとくにめく
因ふつらもん。前屋とく試ひをまかねば其文廣志がくそびとのうて
まふとけの思ひをくはせしと其人故も我頭と転がくとく
百廿六
 くらの負をはまりてからひをくらひとく
 てかうじをとく。とく。とく。とく。
 べ。とく。とく。とく。とく。とく。



論語先進篇曾人爲長舟周子著日の舊貫知何以故作此段りとすて並りとすれ
入れどもしてのひりとハモトドリ

皇

稚房

稚房大納言、又、一ふくよし人して大納言也。院

稚房

正三位上源氏平良門少政大臣玄太公の男大納言文宣

人將

義友人納言を大將と並官

とふとそと

院内 はす多院ふ

ふ。

其比院の所二院りはまな深

草龜

山院の稚房大納言の管所は御茶

岳

ものより仕たと飼之ノ領て禽肉損

とふと

生かう犬の因とく

昇進

もとまう官とく

そ

ひが大將のひきとまがりと

し

とく院内 はす多院ふ

こ

稚房之者有實くそとく

金魚

金魚の仕事はまくとく

とく

院内 はす多院ふ

事典の介がまよこなるかへども事

ゆくはうす切 庫玉もと慶とす

大の足とまじてある、うるさい子虚玉か

りへ春へて浸潤の音とあらざる

えり立つてあらぬとるな、ばらす

さくまきとあらぬとるな、ばらす

三行のあらぬ音宜とくとくとくとくとく

苦室の拂ふ水ととくはねりとく

ちくく畜生残害の類 ちくく畜生虫魚のた

いとくじうと畜生残害と云、俱舍と

てくわん天理と做はざとくじうとく

くわんまみみた畜生

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくいとくとくとくとくとくとくとく

鳥居よりも人を先よそへてひ
りと負て鳥居に歸く悔ふ
久相手ハ負て鳥居へ是んと詔
ちあへ_{我負て}ワと負ふやうと今
はまづ付ひやむまうりと
まつこぐと風つゝア
く田のそと我とや
ひ代うすにいゝも 親友のたまきと
柳のわくとひとくとまかまとひまき
金戒_{人といらわざしく}人の智業と
竹のうてわざしとらどくと
礼_{よわ}とくとまうへ禮を一日
よわ_しとくとまうへ
としとくとまうへ
類_{たぐ}とくと
腰_{こし}とくと見つゝとくと
吾_ごとくと

大内ノ職とも職とハ官職にてどもとあり
其官任よりしてまことにありと大内
あく職利徳ハ人のわざをしらすまあるく
事はよき事と云ふ利也とも捨てうる類也て
皆事向の事より仁義礼讓とも故にやう
カ太職大利ともに辞ふるに由の半より
更といひ世人よりはいれども此段始勝負の更と連絡
禮謹ひととくへり人をもむらんとせと好いルト
をもす向へて若よヤラシジモトムトモトウタリ

自國ラシキ

貧者シテ是古語と轉じ用ひて世の愚弱人
有へゆる者ありこれよりはる候
て尤大どほりあゆく曲礼云貪者不穧
敗處礼者不穧助効爲礼ゆゑ

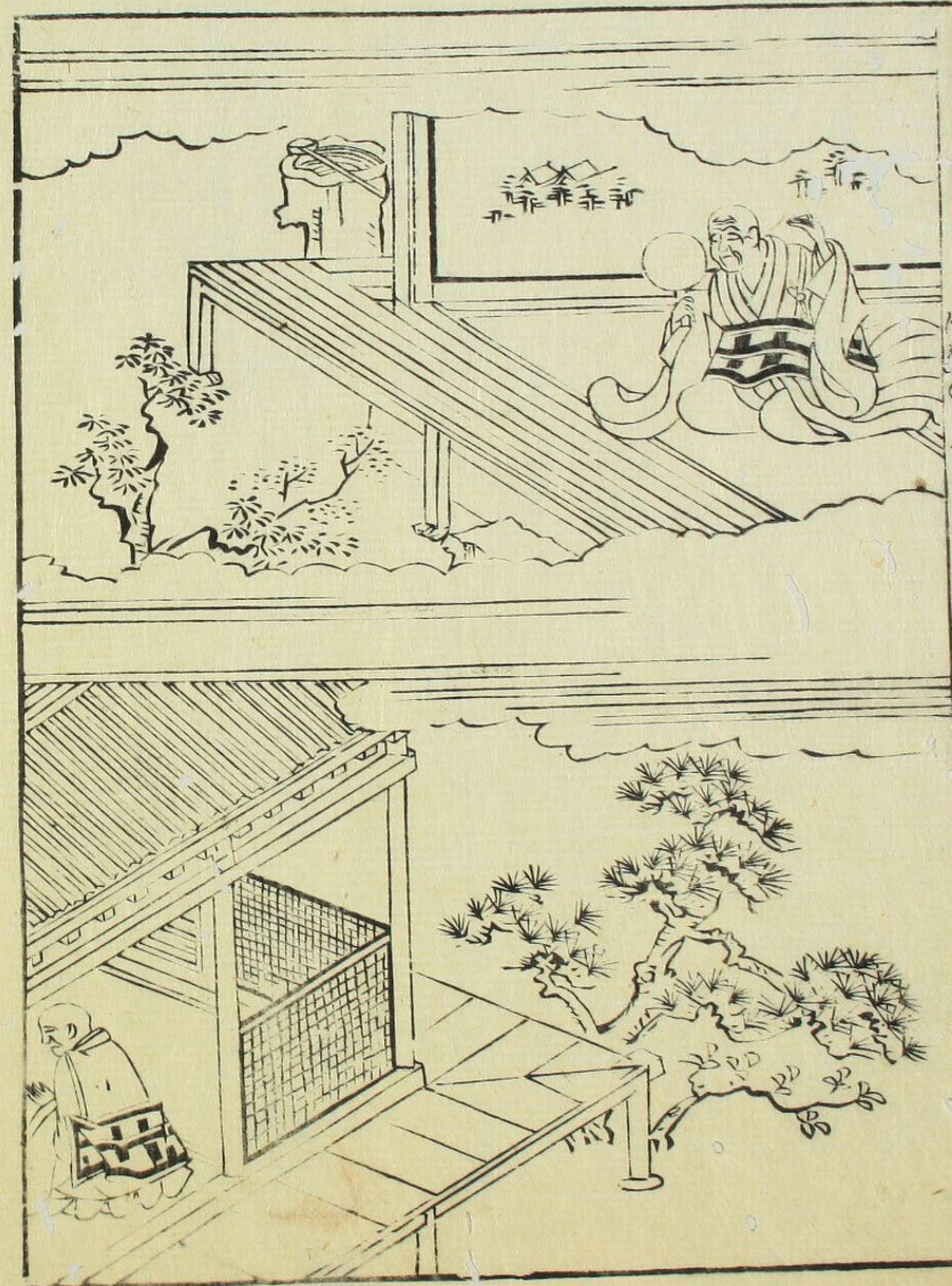
及くかは遂スよやひとと智シテヒ
貪者財用ふとくとむ人の禮也
主ふとゆふのみの誤ミスあらへども
わざをとすとあそもとくもとく
とくにとくに譲ヨリもくとくもとく
うざれざぬもくとくもとくもとく
うざれざぬもくとくもとくもとく

此段見合限シテ此段見合限シテ

羽入作道
洛陽南
鳥羽及白河

皇
上
の
御
通
し
羽
扇
を
も
う
か
く
の
事
は
な
く
い
ま
す
か
と
か
く
の
事
は
な
く
い
ま
す
か
と
か

殿名八省院。天子膳朝郎位諸司。吉甫所入。
謂之中堂。李部主延喜ノ子式部の重明親王。其與
吏部刺部音通。左傳云義之也。起ノ上。禁秘抄云四方。自妻戶南大寺。
簡慢同清涼殿。天子入以寢所。東枕。百六三ヨン。
禮記云寢時東首。孔子曰東首。論語。齊君視之。東首。加朝服。把紳。朱子
註云東首以受。吉毛。陳氏。天地生氣於東方。白河院。は三休院。皇子七十二代帝。
南札。ちの事也。白河院。少首。よひ寝。南
神宮ノと。禁秘抄云凡祭中作法先。神界事。是暮敬神之歟。慮無懈怠。自地以神
宮并。内侍所。方不爲御跡。伊勢。南
之。伊勢。南



行とありて、尚書大島謨念茲在
茲、辯と日、樂を以て
樂、こうじます。六人よしとれりも
と云ひ方より来てまふ。
アキリヤ
不器量、藝の技術、もろい人じふ
藝へゆどく、可か退せし、愈よと但藝能修業
くらうと藝の達能、まづ半よがくさむ
藝の高ともせば能、肩あくべと

況とよハルトキトシ
トナシ人トヨヒトノ眉
アヤシバシル秋声處云况事其力所
及憂其育所不能此文似リ
方トシテシ此方トシ格之求モ物
終ニ人幸人トシトシトシトシトシトシ
原田スナスコ
次貞秀子人幼乞入自ト
資季正三位大納言号楊柳法名了空
具氏佐三位宰相中將号中院

云偏よひ塙、俗ナニ正字ハ鹽也韻會
鹽余康虎說文鹹也ナリミタニ 篴鹽色
古者夙沙初作煮海鹽、徐曰黃帝
臣也スルノトビト 有房玉也アマガシマ と離
あと辭ヘタハシマ 今ハさうりともすと離
御身分もてわくもよへん
シトムシトム トリえよとハ雲クモ ハ響ヒビ トアリ
既スル よわくもれよスル
ニハ勤毛 一足ヒツ トタリ
兵ヒサギ ひま集ヒドリシヨウ トシヨウヒヨウ トシヨウヒヨウ
よそくしてどり、乞ヒのみゆことやに
まことよヒトヨウ こがめりてぬしりむよヒトヨウ
まうりよヒトヨウ はあと退ヒタク トモ
百より人ヒト や人ヒト がまヒタク リぞうヒタク よヒタク
でヒタク よヒタク とヒタク

中五〇三冊
お弁
草紙